

震災一周年「追悼」と「希望」と

心の復興誓って回向

戦後初、臨黄各派合同で

松原泰道氏の追悼法話聞く

兵庫県南部地震で犠牲になった六千三百余人の冥福と、被災者の心の復興を祈る「阪神淡路大震災合同法要」が、十五日に臨済宗黄檗宗連合各派合議所の主催により、神戸市中央区の神戸仏教会館（南禅寺派広厳寺）で執り行なわれた。臨黄各派が一堂に会しての法要は戦後初めてのことであり、今回の法要を契機にして、復興に向けた支援体制の絆を強めていくことが期待される。

合同法要は午後二時から小倉宗徳妙心寺派宗務総長（臨黄合議所理事長）の導師で開始された。昨年夏に二階建てのプレハブが復興された神戸仏教会館本堂には、被災地寺院の住職を含む各派からの尊宿と、立ち会った遺族合わせて約百人が参集。般若心経や消災咒、観音経、四弘誓願が唱和されるなかで静かに焼香が行なわれた。

当日は被災者義援金を合議所に託した山岸善来聖福寺師家と講師の松原泰道龍源寺閑栖（南無の会会長）のほか、次の各派の宗務総長（方広寺派は宗務総理）が出頭した（敬称略）。

虎山秀禅（南禅寺派）、青木謙整（東福寺派）、小野澤寛海（大徳寺派）、長尾守峰（相国寺派）、野田文外（建仁寺派）、島見周悦（天龍寺派）、吉川積翠（永源寺派）、竹川圓應（向嶽寺派）、補泉正宗（方広寺派）、坂本大耕（国泰寺派）。

この他、佛通寺派からは照峰馨元宗務部長、黄檗宗からも数人、禅文化研究所から山田宗敏所長、花園禅塾から宇佐見宗玄塾頭と塾生七人がそれぞれ荷担。鹿児島市から駆けつけた尊宿もあった。

法要終了後、松原龍源寺閑栖が「自らを光とし法（おしえ）を依り所とす」と題して、追悼法話会を行なった。

松原氏は被災地の仮設住宅で展開されている宮下玄覚地蔵院住職（妙心寺派）らの「花いっぱい運動」を紹介して、次のように語りかけた。「花は忍耐の忍。雨風に打たれて、艱難辛苦した花のほうが色も香りもいい。歯をくいしばって諦める、そんなじめつとしたことはお釈迦さまはお説きにならない」

さらに松原氏は、一休禅師の作と伝えられる「今死んだどこへも行かぬここにおる尋ねはするなものは言わぬぞ」という歌を挙げ「正しい教えをおさめて生きていけば、亡くなった人も喜んでくださる」と、死者と遺族が一体であることを強調した。

追悼法話が半ばを過ぎて、松原氏は、『きけわだつみのこえ』の巻頭に掲げられたジャン・タルジューの詩（渡辺一夫氏訳）を引用した。

「死んだ人々は、還ってこない以上、生き残った人々は、何が判ればいい？」

松原氏は、聴衆一同に次のように訴えた。「死んだ人は、生きては戻ってこない。この確認から私たちは成長する。これからどう生きていけばいいのだろうか。自分に何ができるのか。何をしなければならぬのか」

その答えとして、松原氏は「共生」という言葉を挙げて、被災者への大きな期待を表わした。

「人間は皆、助け合わなければ生きていけない。震災を受けた神戸の人々は、『手を取り合ってやっていきましょう』と、世界の人々に伝えていく。このことを誓願としていただきたい」

松原氏は最後に「運の良し悪しと幸、不幸は別だ。運が悪くても、私たちは幸せになることができる。去年よりも少しでも豊かになった心と健康が、亡くなった方への最高の供養。お互いに心の成長を」と締めくくった。

追悼法話のあと、小倉理事長が「御礼のことば」、閉式の辞を述べて合同法要は円成した。

被災の犠牲者を偲んで営まれた臨黄各派の合同法要【写真は省略】

神戸のミニFM局が放送開始

七カ国語で復興への情報発信

真の国際化めざして

社長はヒゲの神田司祭

FMわいわい

カトリック鷹取教会から電波

大震災の傷跡が今も生々しく残る神戸市長田区に、復興へ向けての心のよりどころになるように、との願いを込めて十七日、小さなFM放送局（コミュニティー放送）が誕生した。長田区は震災前、世界二十八カ国の人々が住んでいた地域で、この“FMわいわい”も日本語、ハングル、ベトナム語など七カ国語で放送される。被災者救援ボランティアの“基地”となったカトリック鷹取教会（長田区海運町、神田裕司祭）内に放送局が置かれ、国際都市神戸で、電波を通じて国境を超えた真のコミュニティーをつくることを目指している。

鷹取教会周辺一帯は震災で壊滅した住宅が多く、一年経った今も周辺には更地が目立ち、復興は遅々として進んでいない。地域には外国籍住民が多く、言葉が通じないために、震災後、不安な思いで毎日を過ごした人も少なくなかった。

そうした定住外国人に正確な情報を提供するため二つの外国語放送局ができ、七月にこれが合併した。鷹取教会を拠点とし、近畿電気通信監理局からの本免許取得へむけて活動。今月九日に同監理局によって予備免許を交付されたため、震災一年目に当たる十七日に、(株)エフエムわいわいとして放送を開始した。

開局セレモニーは午前十一時半から鷹取教会内の同放送局前で挙行された。同教会は震災救援のボランティア基地として注目を集めてきただけに、開局式にはTVをはじめマスコミ各社が殺到。(株)エフエムわいわいの“社長”でもある神田司祭は晴れやかな表情のヒゲ面でテレビカメラに囲まれて開局の辞を述べ、ボランティア関係者や風呂屋の主人など地域の人々を中心とした放送局運営委員、番組審査委員を紹介した。

正午の時報とともに、“FMわいわい”が開局第一声をあげ、特別番組「被災地神戸に夢と希望を」が始まると、参列者から大きな拍手がまき起こった。缶ビールで乾杯のあと祝宴へ。さまざまな国籍の参列者のため、ベトナムと韓国、日本の三カ国の手作りの料理が振る舞われた。

カトリック教会としての被災物故者追悼式はすでに十五日に執り行なわれており、この日は“産声”を上げた新生放送局のための祝賀一色。神田司祭も参加して、賑やかな太鼓とともに餅搗きも行なわれ、いたるところに笑顔が溢れた。

☆☆☆

“FMわいわい”は日本語、ハングル、ベトナム語、スペイン語、中国語、タガログ（フィリピン）語、英語の七カ国語で放送。地域密着型のコミュニティー放送として、地元住民や外国人短期滞在者などのために母国や日本国内の情報を提供するとともに、「母国」、「日本に住む」というテーマを通じ、相互理解と交流を進めてゆく。

周波数77・8MHz、出力10Wで、放送エリアは神戸市とその周辺。番組の制作と放送も全てボランティアが担当するという。

開局第一声に耳を傾ける神田司祭＝左から2人目＝〔写真は省略〕

一周忌の法要を厳修

西山禅林寺派阿弥陀寺 森管長が「ご親教」

浄財で建立の記念碑を除幕

浄土宗西山禅林寺派では十六日、神戸市兵庫区中之島の阿弥陀寺（澤木亮道住職）で「兵庫県南部地震犠牲者一周忌法要」を厳修、遺族ら約百人が参列した。

まず、全国から寄せられた浄財で作製された記念碑の除幕式が行なわれ、森準玄管長をはじめ、五十嵐隆明宗務総長や遺族代表らが除幕。

続いて、参列者全員で焼香を行なったあと、五十嵐宗務総長が要旨次のように「追悼の言葉」を述べた。

「突如襲った天変地異は、一瞬にして六千有余の人々の生命を奪い、都市を焦土と化してしまった。家族を亡くし、一切の財産を失った被災者の方々の痛憤の思いに対し、私たちは到底その痛みを共有することはできない。

ただ、我が宗派の青年僧をはじめ、全国各地から馳せ参じたボランティアの方々の協力は、せめてもの救いであった。この悲劇をいつまでも忘れることなく、復興へ向け、一人でも多くの方々と共に取り組んでいきたい」

続いて森管長が要旨次のように「ご親教」を行なった。

「多くの皆様のご協力により、このように盛大な一周忌法要を営むことができ、いささか心安まる思いがする。あのような大地震は、いつどこで起こるかも分からない。どんなに科学が発達しても、予測することは困難である。

幸いにして、被災地では復興が進み、また震災を通して、お互いに知らない者同士に新たなる協力関係と助け合い、分かち合う精神が生まれたのは尊いことである。被災者の方はこの災害に負けることなく、一所懸命に復興に努力していただきたい」

引き続き、貝原俊民兵庫県知事らの電報が披露され、最後にインド音楽の奉納が行なわれて同法要を終えた。

阿弥陀寺で営まれた西山禅林寺派の震災一周忌法要【写真は省略】

六千三百本の灯明点じ

追悼市民法要営む

超宗派で出仕 高野山真言宗太融寺

大阪市北区の高野山真言宗太融寺で十六日、超宗派の僧侶らで構成するボランティアグループ「BVおおさか」の主催する「阪神淡路大震災一周忌追悼市民法要」が厳修され、遺族ら約三百人が参列した。

日没後、本堂前に約六千三百本の灯明を灯して犠牲者を追悼。引き続き、第一部の同法要が午後六時半から本堂で営まれた。

まず、讃禱歌詠唱団とBVおおさか聖歌隊による聖歌が流れるなか、遺族らによる献灯・献花が行なわれた。

このあと、参列者全員で黙禱。引き続き、母親を亡くした西宮市の村上忠和氏が「追悼文」を奉読。

次に同聖歌隊により、「永訣」など六曲が披露された。

続いて法螺貝の音が境内に響きわたる中、全員で般若心経を唱え、最後に「上を向いて歩こう」を歌って同法要を終えた。

また、第二部の記念講演会では、国連ボランティア名誉大使の中田武仁氏が「世界市民」と題して講演した。

聖歌の声も流れた太融寺の市民法要【写真は省略】
